

「八角形の基壇」とみられる遺構を確認！

南宋の瓦が出土する鹿児島県三島村黒島の大里遺跡で。
平安時代末、日宋貿易の解明に進展。

鹿児島国際大学国際文化学部の中園聡教授(考古学)を代表とする研究チームは、このたび鹿児島県の離島、三島村黒島の大里遺跡の発掘調査で、12 世紀の中国寧波産の瓦を葺いた建物の基壇(基礎)とみられる八角形の珍しい遺構を確認しました。平安時代末の日本で、博多や大宰府をはじめ九州の要所にしか見られない中国南宋様式の瓦(寧波産)が注目されてきましたが、建物の構造やこの瓦がどう使用されたか、これまでほとんど謎でした。今回発見した基壇は、この瓦を葺いた建物の性格や、記録に残っていない日宋貿易の実態などを知るうえで重要です。この発見の学術的意義と国際的重要性にかんがみ、成果を公表します。

多数の貿易陶磁器をはじめ国内外の遠隔地から運ばれた遺物が出土する大里遺跡は、中国南宋様式の瓦(南宋瓦)が存在することでも注目すべき遺跡です。南宋瓦は、日本列島の中でも九州の一部でのみ見られる極めて特殊な遺物で、当時の国際貿易都市・博多遺跡群を中心に近隣の主要遺跡のほか、長崎県の一部、薩摩半島西部の万之瀬川下流域遺跡群の一部で出土例があり、大里遺跡は列島最南端の南宋瓦出土地です。

しかし、南宋瓦の各出土地で、どのような建造物に使用されたかはこれまで手がかりがほとんどなく、とくに基壇(建物の基礎、土台)は未確認でした。大里遺跡で 2014 年から継続的に発掘調査を実施し、南宋瓦が多い第 1 地点で人工的な整地の痕跡を確認していましたが、このほどそれが、八角形が意識された 12 世紀頃の基壇とみられることが判明しました。

発見された遺構

基壇は、上面で対角距離(直径)約 8.9 m、一辺約 3.4m(復元値)の八角形で、裾部は一回り大きく、対角距離(直径)10~11m ほどと推定されます。基壇の周囲には、石列や石積があった可能性があります。諸状況から南宋瓦はこの基壇に伴うとみられます。基壇とその周辺から焼土遺構も数基検出しました。

意義

今回の発見は、南宋瓦出土地の南限としても、それを葺いた建物の可能性が高い遺構としても貴重です。この基壇は、集落南の奥まった聖地に建つ宗教施設の基礎であった可能性を考えています。古来、東アジアでは八角塔・堂が散見され、日本では本遺跡と時期が比較的近いものに京都法勝寺の八角九重塔跡、現存最古の禅宗様建築の長野県安楽寺の八角三重塔(国宝)などがあります。一方、中国でも八角塔などが見られ、大里遺跡の基壇がどの系統のものが問題となります。大里遺跡の基壇



上: 大里遺跡第 1 地点の 3D 画像



下: 上図の基壇部分の図解(縮小。左半分は推定復元)

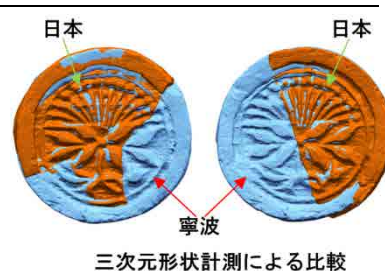
は、周囲から南宋瓦が出土すること、神社などがある宗教的な場所であること、北部九州では主要な寺社の一角などで南宋瓦が見つかること、東アジアで八角形は仏教系の塔・堂であることが多いことなどを総合すると、八角形の塔・堂、「祠堂」などの宗教的建造物の可能性が考えられます。

大里遺跡が南宋船の寄港地であったか、博多や九州本土、南西諸島とのつながりがどうであったかなど詳細の解明は今後の課題ですが、僧俊寛らの配流地とみられる隣の硫黄島は中央政権による連絡・コントロールがある程度可能だったと考えられるうえ、日宋貿易の主要輸出品の一つである硫黄の産出地でもあったことを考慮すると、大里遺跡は広域に開けた貿易・交易ネットワークの脈絡でとらえるべき重要な場所であった可能性があります。

今回の発見により、南宋瓦を葺いた宗教施設であった可能性が高まり、これまで謎が多かったこの種の瓦をもつ建物の性格や、中世初期日本の「南の境界地域」の実態、博多以外の異文化導入の窓口としてのこの地の性格などを解明するうえで大きな進展が得られたことになります。

経緯 南宋瓦は、博多などと中国で類似した瓦が出土するため、専門家の間で中国から搬入されたという説と、中国から工人が来て日本で作られたという説の二説がありましたが、産地の絞り込みが難しく、「同範瓦（同一の型で作った瓦）」の発見が待望されていました。中園教授らは2015年、福岡市博多遺跡群、箱崎遺跡と同範の瓦を中国寧波で発見し、1000kmの海を越える超・遠隔地間で瓦の同範の確認に成功した世界的に極めて稀な例となりました。その際、南宋瓦の成分が、博多周辺のほか三島村、薩摩半島西部、寧波の蛍光X線分析で一致し、寧波で生産され搬入されたことが判明し、問題を一举に解決する成果として日本・中国で大きく報道され、注目されました。

それ以来の課題の一つが、南宋瓦を伴う遺構を見つけ、その性格を解明することでした。三島村の支援、黒島の方々の地域の歴史を理解したいという熱烈な思いを受けて調査を継続し、今回の成果となりました。



備考

1. 本遺跡では、発掘調査方法を刷新し、データの多様な利用を可能とする「悉皆的 3D 発掘」の開発研究に継続的に取り組んできました。
2. 本遺跡の調査は、三島村との連携協定に基づく「三島村・鬼界カルデラジオパーク」関連事業、および日本学術振興会・科学研究費による悉皆的 3D 発掘の開発研究によるものです。
3. 『季刊考古学』177号（10月刊行）に速報が掲載される予定です。

問い合わせ：鹿児島国際大学入試・広報課（広報担当）

TEL 099-261-3211（代表）

鹿児島国際大学国際文化学部 教授 中園 聡

TEL（同上）



三島村・鬼界カルデラジオパーク